

〈論文〉

『平家物語』 卷十一 〈屋島合戦前日譚〉における覚一本の方法

——三条西家本・覚一本文の先後関係について——

吉 永 優 真

一 はじめに

本稿では、数ある『平家物語』諸本のうち、^(注1) 三条西家本と覚一本を用いてその詞章を比較分析し、両本の先後関係をさぐる。あわせて、三条西家本との比較をとおして覚一本の方法についても論じる。

八坂系を代表して三条西家本を用いるのは、「吉永優真（二〇二四a）」など過去の拙稿において三条西

家本を積極的に八坂系一類本の代表として扱うべきだと結論づけたためである。^(注2) また、覚一本を一方系諸本の代表として扱うことは、現在刊行されている各種全集の底本に多く採用されていることを考慮すれば妥当だろう。

さて、『平家物語』諸本論における主要な論について、語り本系の先後関係論を中心として簡潔に確認し

ていく（各説で呼称が異なるが、できる限り現行の呼称に相応するよう改めた）。まず名前が挙がるのは（山田孝雄（一九一一））だろう。山田は、多数ある『平家物語』諸本を博搜し、その形態から「灌頂巻を立てたるもの」と「灌頂巻を立てざるもの」とに分けている。八坂系諸本については、「灌頂巻を立てざるもの」をさらに「八坂本及びその一類」と「如白本及びその一類」（おおよそ現行の四類本と東寺執行本）とに分け、「八坂本及びその一類」を「八坂本」（おおよそ現行の二類本相当）と「中院本及びその同種の本」（現行の一類本B種相当）とに分けている。灌頂巻の有無による分類は現行の諸本分類にも通じているところがあるが、この時点では、諸本の先後関係についてはそれほど触れられていない。山田の後（高橋貞一（一九四三））が覚一本を古態とし、覚一系諸本周辺本文（以下、周辺本文）を経て八坂系一類・二類へと展開すると論じた。また、「渥美かをる（一九六二）」は、周辺本文から一方系と八坂系に分岐し、流布本へ展開していくとした。これらの先行論を経て（山下宏明（一九七二））は、屋代本から八坂系と一方系に分岐し、周辺本文は一方

系の末流とした。これらの流れを汲みつつ、一方系よりも八坂系が後出であるとする論が「千明守（二〇一三）」である。また、近年で八坂系諸本の研究について成果を上げたのは（山下宏明（一九九七））であるが、こちらも八坂系は後出として扱っている。

以上のような『平家物語』諸本論が紡がれてきたが、その実、八坂系諸本と一方系諸本の先後関係などは疑義が残る。というのも、ここ数十年の潮流として文献学的手法を採った諸本論が多く提出されてきた。文献学的手法は誤字や補入訂正など、机上のやり取りを想定しており、近い関係にある伝本同士（たとえば兄弟本や親子本）へ適用した際に効果を発揮する手法なのだが、系統を異にする伝本同士に当てはめるにはいささか問題なのである。

それでは、どのような手法なら系統の異なる伝本同士でも諸本の先後関係等を論ずることができるのか。稿者は各伝本の〈指向^{注3}〉、つまり物語の表現や文脈、そしてその背景にある政治姿勢や表現意図などを読み解くことによって、その伝本の性格を分析し、その〈指向〉を比較することによって先後関係の指摘ができる

と考えている。ただし、ここで注意したいのは、〈指向〉によって明らかにする先後関係とはあくまでその伝本の持つ本文および構造に關しての先後関係であり、伝本そのものの先後関係ではない。実物としての伝本と、それが内包する本文とは切り離して考えなければならぬ^(注4)。そこで、便宜上「三条西家本」や「覚一本」の呼称で論じるが、それは「三条西家本文」および「覚一本本文」であることを前提とされたい。

本稿では、右に述べた〈指向論〉によって、卷十一〈屋島合戦前日譚〉を対象に、三条西家本・覚一本の先後関係、および覚一本の方法についても論じる。先行の諸論とは異なる結論になる見通しである。

二 三条西家本の先出性と覚一本の後次性

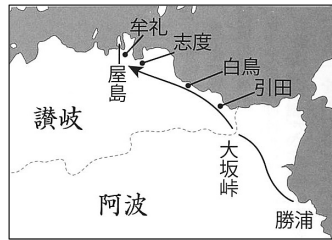
以下、本稿で使用する本文は【対照本文1】および【対照本文2】に示し【対照1】と【対照2】は連続した本文である）、引用する際は【対照1】Aや【対照2】Aのように該当する箇所を表記した。そのほか、対照本文に記載しなかった部分は適宜本文中に引用する。

三条西家本と覚一本を比較したとき、とくに顯著に

違いが表れているのは【対照2】「文奪い」に相当する場面だ。ここで注目すべきは【対照2】Aの位置が異なる点と、【対照2】D相当が覚一本に存在しない点である。後者は第三節で述べるため、本節では前者を中心に述べる。この場面は【対照1】D、義経が近藤六親家の案内で大坂山を越えていくところからつながつている。三条西家本は大坂山を越えて引田で休憩し、「丹生屋・白鳥・高松の郷」と進んだ先で「文奪い」ばなしとなる。対して覚一本は、【対照2】Aが「文奪い」ばなしの後ろに位置している。これはつまり、覚一本の「文奪い」は大坂山を越える途中で、まだ夜も明けていない時間に行われているということだ。

ここで、地名とその位置関係を確認しておく。「大坂山」は徳島県板野郡板野町（新日本古典文学大系、二六六・二六七頁の注による。以下同様）のあたりで、香川県との県境に位置する。「引田」は香川県大川郡引田町引田（現東かがわ市引田）のあたり。「丹生屋」は現在の丹生駅の周辺で、香川県大川郡大内町引田（現東かがわ市引田）のあたり。「白鳥」は香川県大川郡白鳥町白鳥（現東かがわ市白鳥）のあたりである。ち

なみに、「丹生」と「白鳥」をこの場所と仮定すると、「白鳥」のほうがやや南東に位置することが、『新編日本古典文学全集』の注にて指摘されている。「高松」は、香川県高松市高松町に「古高松」という駅があるが、その周辺と考えられる。屋島は、この「高松」から北にほど近い場所に位置している。【図1】は〔野中哲照（二〇二二）〕一二〇頁から引用した地図だ。「高松」は、「牟礼」とある部分の近辺である。



【図1】

この位置関係を踏まえて三条西家本の詞章に立ち戻ると、三条西家本は「高松の郷」を「うち過ぎうち過ぎ」しているところで文奪いが行われるわけだが、こ

れではあまりにも平家軍に近づきすぎている。平家軍のいる屋島は目と鼻の先（たかだか五キロメートル程度）であるにも関わらず、ここで出会った男たちに屋島への案内を頼むのは、平家軍に気づかれる可能性が生じてしまい、やや不自然である。中院本の舞台設定は明らかに破綻していると言つてよいだろう。^{注6} 対する覚一本は「大坂山」を越えているさなかであり、これから讃岐国に入ろうというところで案内を依頼するため、義経が屋島までの土地勘がないと説明することにも、ある程度の信憑性が生まれる。このような地理状況が考慮され、整っている詞章を、あえて崩すとは考えにくい。覚一本（あるいはその前後の）段階において、現地の地理を理解している人物が、その地理にそぐうように改変した可能性が高いということだ。覚一本の〈整合化指向〉である。つまり、三条西家本は先出的で、覚一本は後次的だと言えよう。

三 覚一本の方法

前節において、三条西家本よりも覚一本のほうに〈整合化指向〉による後出性が認められることを指摘した。

しかし、前節で述べた以上に、覚一本には多くの〈指向〉が確認でき、そのどれもが覚一本の後出性をうかがわせる。以下、〈指向〉の内容ごとに論じていく。^{注7}

1、〈明瞭化指向〉

まずは〈明瞭化指向〉である。ある描写を、読者が明確に想像しやすく改変するなどの〈指向〉を言う。小説や論文等を執筆した経験のある人は、自分で書いた文章を後から読み直した時、「これでは伝わりにくそうだからすこし変えよう」と考えて表現を変えたり言葉をつけ足したりした経験があるだろう。そういった思考が異同の生じる背景にあるのではないか、ということである。

【対照1】の直前、義盛に連れて来られた親家の装束描写の部分では、三条西家本と覚一本で親家の装束や行動に多少の違いがある。三条西家本と覚一本の本文は以下のとおりだ。

齢四十ばかりなる男の、節繩目の鎧着たるを、甲を

脱がせ、弓外させ、乗りたりける馬をば下人に引かせて具して参る。（三条西家本）

歳四十ばかりなる男の、黒革緘の鎧着たるを、兜を脱がせ、弓の弦外させて、具して参りたり。（覚一本）

登場場面は、その人物の性質などが示されることの多い重要な部分であり、鎧が「節繩目」と「黒革緘」とで異なる点も興味深い^{注8}が、ここでは「弓外させ」と「弓の弦外させて」の違いに注目したい。「弦」の有無という小さな差異であるが、じつはこの一語の有無によって読者の印象が異なってくる。三条西家本のような「弓外させ」という叙述では、弓の弦だけを外させているのか、それとも弓自体を持たせないようにしているのかがわかりにくい。仮に後者であるならば、弓をもっていないことをわざわざ示す意図が不明である（あるいは上陸時に弓を警戒していたことからの連想だろうか）。それが覚一本では「弦」であることを明記しており、武装解除の様子が明確だ。文意が多様で拡散的であった部分が、たった一語の存在によって一

意に定まる（読者の認知負荷を下げていくというべきか）ようになる。行間が補われているということだ。

このように、語を追加することで文意を明瞭にする〈明瞭化指向〉が覚一本に確認できる。明瞭な部分をわざわざ削除してわかりにくくしていくとは考えにくいため、ここは三条西家本の形が古いのだろう。

2、〈焦点化指向〉

つぎに〈焦点化指向〉を見ていく。これは、ある人物やある出来事に対して焦点を当てようとする〈指向〉である。その人物、出来事以外の存在感や情報を薄くすることで相対的に強調されていると言い換えてもいい。

ひとつは、先に引用した親家の登場場面であるが、三条西家本には波線部「乗りたりける馬をば下人に引かせて」という一文が存在する。対する覚一本にはこの一文がない。後の場面を見ても三条西家本・覚一本ともに親家が馬に乗る描写は存在しないため、この一文自体は登場場面においてのみに意味を持つものである。

るのだろう。ただし、覚一本には親家の軍勢を一部取り込む描写がある。そうであるなら、当該部分は新たな意味を有することになるのだろうか、実態として覚一本には存在しないのも事実である。では当該部分が存在しないことにはどのような理由があるのだろうか。三条西家本・覚一本はともに、親家を案内者として取り立てる際に、「逃げて行かば、射殺せ」と命じる。つまり、逃げられてはならないわけである。だが、馬を連れていては逃げられてしまう可能性が高くなることは容易に想像できる。それに、軍勢を取り込むと言っても、親家を馬に乗せて指揮をさせるとは考えにくい。本来敵であるのだから、逃亡や反抗が想定されるためだ。どのような視点から見ても、ここで馬を登場させる必要性はかなり低いと考えてよいだろう。

今述べたことは、もちろん『平家物語』読者も読みながら考えるはずだ。登場場面として親家に焦点を当てたいところに必要以上の情報を示すと、〈明瞭化指向〉でも述べたように拡散的な詞章となり、読者の没入感は損なわれる。覚一本はそのような情報を削ぐことで、親家に焦点化するのである。

もうひとつ、【対照2】Bにおいて、文を平家側に届ける男たちの描写が異なる。三条西家本は「簀笠・糧料・文ども少々したため持ちたる男三人」とするが、覚一本は「立文持つたる男」と、持ち物と人数に違いが生じている。文奪いの内容としては、三条西家本も覚一本も男が一人いれば成立するものである。そのため、三条西家本では「三人」であることやその持ち物が話に関わってこないことになってしまう。これも拡散的なのである。覚一本のように、最初からひとりだけ、持ち物は文のみ示すという形であれば、男と義経の二人の会話と、話題の中心となる文に焦点化される。そして、読者も自然とそこに注目することになる。

〈焦点化指向〉を二箇所見てきたが、情報量が多く拡散的である状態へと変更していくことは、物語という性質上（読者・聴衆の存在を意識する点から）考えにくい。覚一本が後出なのだろう。

3、〈劇場化指向〉

〈劇場化指向〉とは、場面をより劇的に描く指向で

あり、物語の厚みが増すこととかかわる。【対照1】における対能遠戦がこれに該当する。【対照1】Cの傍線部を見ると、三条西家本は「桜間、散々に手向かひて、屈強の馬を持ちたりければ、うち乗りて、側なる沼よりぞ落ちにける」と、能遠が逃げ落ちたことを端的に描くのみであるが、覚一本は詞章が多い。「矢先を揃へて差し詰め引き詰め散々に射る」という能遠勢の奮戦ぶりや、そこに向かつて「喚き叫んで攻め」て行く源氏軍の勢い、兵たちに守らせながら自身は逃げていく能遠の様子が描かれている。ならんで次々に矢を射ている姿、向かってくる矢にもおじけづかず大声を響かせながら走る源氏軍の姿、矢を射る兵の後ろで馬に乗って遠ざかっていく能遠の姿がありありと想像できよう。これをもとに小説や映画などを作るのではないかというほどに劇的だ。迫真性の付与と言ってもよい。覚一本の対能遠戦は、それ自体がひとつの場面となるように肉づけされ、話の厚みが増しているのである。^(注9)

この違いは、単にもとの本文を写したとか、多少の誤りを訂正したという程度では生じない。明らかに意

図的な改変である。たとえば、語りをしていく中で熱が入って細部を脚色した、あるいは聴衆・読者を楽しませよう、興奮させようとしたなど、様々な〈劇場化指向〉の背景が想像できる。肥大化し劇的になった物語が後になって省略されたと考える向きもあるだろうが、そうであるならば三条西家本において「側なる沼よりぞ落ちにける」というような覚一本にはない情報がつけ足されている点や、「いくさ神に奉^(金10)」との詞章が重複していることの説明が難しい。三条西家本が省略化傾向にある伝本ならば、「いくさ神」が重複する意味が見出せないのだ。やはり、三条西家本が先出で、覚一本が後出なのだろう。

4、〈文脈整理指向〉

〈文脈整理指向〉は、複数の文脈が入り乱れているものをわかりやすく一本にしたり、並べ替えたりすることに加え、文脈の連動をはかったり、次の展開へ円滑につなげていけるように整理したりする、やや上位概念的な〈指向〉である。

以下に引用したのは、親家登場の直後部分で、親家が名乗り、義経が親家を連行する場面だ。

判官、「何者ぞ」と宣へば、「当国^(注1)の住人、坂西の近藤六親家と申す者にて候ふなり」とぞ申す。判官、「よしよし。何家^(注2)にてもあらばあれ、やがて、屋島の案内者に、具して行け。義盛に預くるぞ。物の具はし、脱がすな。逃げて行かば、射殺せ」とぞ宣ひける。(三条西家本)

判官、「何者ぞ」と宣へば、「当国の住人、坂西の近藤六親家」と申す。「何家でもあらばあれ、物の具な脱がせぞ。やがて、屋島の案内者に具せんずるぞ。その男に目放つな。逃げて行かば、射殺せ。者ども」とぞ下知せられる。(覚一本)

注目したいのは二重傍線部だ。鎧を脱がせるという指示と、案内者として連れて行くという判断の順序が入れ替わっている。三条西家本は案内者として連れていく判断が先行し、「義盛に預くるぞ」という一文

が挟まってから「鎧を脱がせるな」という注意が行われる。主題は案内者の部分であるのだろうが、間に義盛に預ける旨を挟むことで「案内者として連れて行くのだから鎧は着たまがよい」という意図が少々取りにくい。むしろ「義盛に預けるから脱がせるな」というおかしい因果関係が発生しているようにもとらえられるのである。それが、覚一本では鎧を脱がせるなという指示が先に行われている。その直後に案内者の旨を述べることで、「鎧を脱がせないのは案内者として使うからだ」という因果関係が、はっきりと別の解釈を挟む余地なく了解されるのだ。意図をわかりやすくするという意味では先述した〈明瞭化指向〉に近い（あるいは内包される）が、ここは詞章を入れ替え、削除して文意をはっきりと伝えようとするという点で、〈文脈整理指向〉が主として働いていると言える。^(注12)

【対照1】Aの位置も両本で異なる。この理由は単純で、三条西家本のように勝浦上陸・親家登場・屋島の勢・近辺の勢・対能遠戦の順で描くよりも、親家を召喚した後に近辺の勢を確認し、対能遠戦の後に屋島の勢を確認するほうがそれぞれのつながりがよい。こ

れも明らかな〈文脈整理指向〉だ。

加えて、義盛に預けるといふ発言は覚一本には存在しない。その代わりに、「その男に目放つな」という一文があり、最後には「者ども」と呼びかけている。義盛一人ではなく、軍全体で見張りをしようということだ。この先で義経の質問を受ける立场上、義盛の旗下にいるよりも独立させておいて全体で見張るほうが案内者としての使い勝手がよさそうである。また、少し先の詞章ではあるが、覚一本には【対照1】Bに親家の軍勢の一部を「我が勢」に取り込む場面がある。「我が勢」とは義経の勢を指すため、義盛に預けるといふ叙述と親家勢の取り込みが両存してしまえば互いに矛盾してしまふ。覚一本において義盛に預ける叙述がないことと、親家勢の一部を取り込む叙述が存在することは連動しているのだろう。後者を描くために前者を削除したのだと考えられる理由（後述）。これも、〈文脈整理指向〉によるものだ。

文奪いの場面にもそうした〈指向〉が確認できる。【対照2】の覚一本を見てみると、身分を詐称した義経の要請が【対照2】Fの位置に移動している。した

がって、文を奪って拘束する【対照2】Gとのつながりが希薄となっている。あるいは、完全に油断していることを確認したということなのだろうか。男の油断という点から覚一本を見てみると、三条西家本が【対照2】Dで描いた会話が存在しない。そして、もっとも決定的なのは、【対照2】Bの「夜のことであり」という一文である。【対照2】Aの位置の違いによって、覚一本では夜半の出来事として描かれており、やや暗い場面設定がなされているが、その暗さによってか、男は義経らを敵と認識せず、むしろ「御方の兵どもの屋島へ参る」のだと勘違いするのである。つまり、「夜半」という時間設定が男の油断を導いているのであり、それによって男と義経らは打ち解けて会話ができるようになっていくということだ。打ち解けているということは、三条西家本【対照2】Bのようにここで身分を詐称する必要はない。その上、三条西家本【対照2】Dにあるような男の嘘や食事による打ち解けの場面も必要ないのである。その二つが存在しないことにより、円滑に【対照2】Eの内容を引き出せるようになるということだ。覚一本は展開の円滑さを重視したのだら

う。これも、〈文脈整理指向〉の一種と言える。

5、覚一本の認識

これまでいくつかの〈指向〉を挙げて覚一本の方法を確認してきた。では、なぜそのような〈指向〉が必要だったのだろうか。前節までに述べてきた〈指向〉を整理しつつ、覚一本の目的、描きたかったことについて考えてみる。論述の都合上、前節まで述べてきたことと一部重複することがある。

〈明瞭化指向〉と〈焦点化指向〉は、どちらも「拡散」を防ぐための〈指向〉であった。拡散を防ぎ、注目させたかったものはないかと言えば、それは親家の存在である。馬が存在せず弦を明示するなどの細かい描写の違いは、読者の意識を親家に集中させるためのものだ。焦点化することにより、要所所で登場する案内者としての親家の存在感が増す。親家の軍勢を取り込むこともこれと通じる工夫だろう。取り込むことで「屋島合戦」の中に親家を位置づけることが可能となる。つまり、当初平家側であった人物の助けによつ

て、**「屋島合戦」**（あるいはその勝利）を導いたとも言えるのだ。^(注13)

ここからは**「屋島合戦」**を起点に確認したほうがわかりやすい。まず意識されるのはその地理状況である。屋島がどこに位置するのかを考えると、つぎはそこに向かうにはどこを通ればよいのかを考えるだろう。この部分を描くのが第二節で述べた**【対照2】A**である。大坂山から丹生屋までは南海道と重なる部分であり、屋島までの道行きとして想定するにふさわしい。だが、ここで問題となるのはこの位置に存在する文奪い**【対照2】A**が文奪いよりも先に位置した場合、平家軍と至近距離で文奪いが行われることになる。その点、覚一本は〈文脈整理指向〉によってそのような違和を正し、文奪いを大坂山越えの道中に設定している。その結果、夜明けも文奪いの後となった。そこで補われたのが「夜半ばかり」である。「夜半」という時間設定は、文を持つ男の油断を描くことにもつながり、「夜のことであり、敵とは夢にも知らず」とあるように義経勢に警戒しないため、**【対照2】D**の存在意義がなくなる。〈文脈整理

指向〉で述べてきたことだが、このように大胆な整理が行われるのは、**【対照2】A**の移動に起因していると言える。たつたひとかたまりの文章の移動からドミノ倒しのように連鎖して文脈整理の必要性に追われるということだ。^(注14)

そうして大胆な整理を行った文奪いで描きたいことは、**【対照2】H**にある「義経に天の与へ給ふ文なり」という一文に示されている。つまりは「偶然性」、あるいは「神の加護」である。この文が平家に渡れば平家は防衛体制を取る猶予が生じ、義経勢がここまで「敵の聞かぬ先に」と考えて進軍してきた意味が消失してしまうため、ここで文を防いだことが勝利につながることとなる。

ここでまた疑問が浮かぶ。この文を「天が与へ」たのはなぜなのか。その鍵は対能遠戦にあると言えよう。というのも、**【対照1】C**には「いくさ神に祀り」という一文が存在するのだ。義経は勝浦近辺に能遠がいることを聞き、これを攻め落とすのだが、そこで能遠勢二十人あまりの首を「いくさ神」に奉納し、「門出で良し」と喜んでいる。要するに、この奉納は「屋島

合戦^レでの勝利を祈願する意図が込められているのだ。

この奉納に神が感応して義経に「文」を与えた、つまり義経の敗北の芽を摘んだのである。^(注5)

対能遠戦が「屋島合戦」の勝利を導くものであるならば、これを軽視することはできない。読者にもこの場面の存在を印象づける必要があるだろう。そこで生まれるのが〈劇場化指向〉である。覚一本の対能遠戦は、三条西家本に比べて詞章が増加し、状況が想起しやすく、他の合戦描写には及ばないものの、戦いとして手に汗握るものとなっていた。^(注6) すこしでも読者の興奮を促し、記憶に残すことを目指したのだ。同時に、そのような戦に元々平家側であった親家の勢が加わっていることも本項冒頭で述べたとおり重要な意味を持つことだろう。親家、対能遠戦、文奪い、そのすべてが「屋島合戦」の勝利を確実なものとするために、互いに呼应しながら機能している。覚一本は種々の〈指向〉によって〈屋島合戦前日譚〉を巧みに描き出すのである。

四 三条西家本の論理

さて、本稿はこれまで、三条西家本と覚一本の先後関係と、覚一本の〈指向〉をさぐることに主眼を置いて論じてきたが、古態本（ここでは三条西家本）には古態本の論理や認識が存在するはずである。そこで、本節では三条西家本の論理を確認していく。

覚一本における〈文脈整理指向〉の中で【対照1】Aの位置が異なることを指摘した。すでに述べたように、覚一本の流れのほうが円滑で無理がないのだが、三条西家本がここにおいて【対照1】AとDの間に対能遠戦を位置づけているのはなぜか。三条西家本の【対照1】AとBは、どちらも「さて」から始まっている。話題の転換を行っているわけだが、連続で使用してしまふと重複の感は否めない。この「さて」は、本来『平家物語』とは別に存在していた対能遠戦を、何らかの意図をもって挿入した痕跡ではないだろうか。加えて、【対照1】Dの冒頭も「また」とあって、話題の転換がはかられており、対能遠戦の部分は独立的である。つまりとところ、【対照1】BCは後から（三条西家本か、その祖本段階において）挿入されたのではないかと

いうことだ。

では、その意図とは何かと言うと、すでに義経に語らせている。「さらば、能遠を討つて、いくさ神に奉れや」とあるように、能遠との戦い（および能遠らの首）を『屋島合戦』の前哨戦として神に奉納することで、最終目標である平家軍との戦に勝つための流れを作ろうとしたのだ。【対照1】Cにおいても再び「いくさ神」に言及しており、討ち取った頸を奉納することが示される。「いくさ神」のための戦として開始され、「いくさ神」への奉納物として処理するのは、この先の対平家戦への伏線、勝利の示唆である。『屋島合戦』に紐づけたいために、【対照1】AとDの間に挿入し、半ば無理やりに『屋島合戦』の中に対能遠戦を位置づけたのだと考えられる。このことはすでに、前節の「覚一本の認識」の中でも述べたが、三条西家本やその祖本段階でそういった意図のもと挿入され、覚一本は意図を汲み取って、それを物語として整えた（練成）のだと考えられる。

また、対能遠戦が本来存在しなかったであろう痕跡は他にも挙げられる。義経らが勝浦に上陸し、親家を召喚して地名を尋ねた際の義経の発言である。

これ聞き給へや、殿ばら。^(金17)いくさにしに來たる義経が、勝浦に着くめでさよ。^(金18)（三条西家本）

これ聞き給へ、殿ばら。いくさしに向かふ義経が、勝浦に着くめでたさよ。（覚一本）

細かな異同だが、傍線部を見ると、三条西家本は「來たる」とし、覚一本は「向かふ」としている。つまり、三条西家本はすでに「いくさ」が始まっているが、覚一本はこれからということだ。義経は源氏軍を率いて平家を討ちに来ているのであり、ここで言う「いくさ」は平家との戦い、すなわち『屋島合戦』だろう。そうであるならば、三条西家本が「來たる」として【対照1】Aにてすぐに屋島の勢力を確認することは合理的である。この二箇所は同じ文脈に支えられているということである。この段階では『屋島合戦』に向かつていたはずが、【対照1】BCを挿入することによって、あたかも「いくさ」が対能遠戦を指しているかのようになってしまっている。本来企図された連動ではない

のである。三条西家本は本来的な軸として、最初から『屋島合戦』を眼差している文脈を有しているということであり、対能遠戦はその『屋島合戦』のために後から挿入したと言えよう。

五 おわりに

これまで、三条西家本と覚一本の比較をとおして覚一本の〈指向〉を中心に論じてきた。五つ挙げた〈指向〉のうち、〈焦点化指向〉については覚一本のみを分析した場合にも見出すことはできるが、他の〈整合化指向〉〈明瞭化指向〉〈劇場化指向〉〈文脈整理指向〉は比較対象がなければ論じにくいところである。三条西家本と比較して覚一本の方法を論じる意義はここにあるだろう。

さて、これら〈指向〉は『鍊成』の観点が重要になってくる。『平家物語』は、語りを中心に行われてきたわけだが、語り手の生活がかかっている以上、聴衆の足を止めるものでなくてはならない。そのためには、物語をより面白く、あるいは目新しいものを目指して独自の価値を生み出す必要がある。そこで働くのが『鍊

成』である。このような観点に立つと、『鍊成』が行われた本文から、そうでない本文へと意図的に崩していくことは考えにくいと言える。つまり『鍊成』が認められるものが後出だという前提が求められるのだ。

改めて本論を振り返ると、覚一本には三条西家本と比べて〈整合化指向〉〈明瞭化指向〉〈焦点化指向〉〈劇場化指向〉〈文脈整理指向〉を確認することができた。いずれも『鍊成』によるものであり、三条西家本よりも覚一本が後出であることは明らかである。「はじめに」で挙げた主要な先行論とは異なる結論であり、本稿の成果だといえよう。

また、古態本には古態本なりの論理があるということも同時に指摘した。つまり、本稿において相対的に先出とした三条西家本も、『鍊成』の過程にあるということだ。今後、より多くの伝本——具体的には読み本系諸本、覚一系諸本周辺本文、八坂系二類から五類本、一方系諸本など幅広く分析し、その流動展開を明らかにすることが課題となろう。

【対照本文】

三条西家本

〔A〕さて、当時、屋島に勢はいかほどかある。「千騎ばかりは候ふらん」。「なぞ少なきぞ」。「さん候ふ。かやうに五十騎、百騎、四国の浦々へ差し向けられ候ふ。阿波民部重能が嫡子、田内左衛門教能、河野を攻めに、三千騎にて、伊予の国々へ越えて候ふあひだ、屋島の御勢は隙きて候ふ」と申す。

〔B〕さて、この辺に、平家の後ろ矢射すべき者はなきか」と宣へば、「重能が弟に、桜間介能遠と申す者こそ候へ」。判官、「さらば、能遠を討つて、いくさ神に奉れや」とて、桜間が館に寄せ給ふ。

〔C〕桜間の城と申すは、三方は沼、一方は堀なりけり。堀のかたより、源氏、関を作りて押し寄せたれば、桜間、散々に手向かひて、屈強の馬を持ちたりければ、うち乗りて、側なる沼よりぞ落ちにける。防ぐところの、家子・郎党二十余人が首を取り、喜びの関を作りて、いくさ神にぞ奉られける。

覚一本

〔B〕「この辺に、平家の後ろ矢射つべいはないか」。「阿波民部重能が弟、桜間介能遠とて候ふ」。「いざさらば、蹴散らして通らん」とて、近藤六が勢、百騎ばかりが中より、三十騎ばかり選り出だいて、我が勢にぞ具せられける。

〔C〕能遠が城に押し寄せて見れば、三方は沼、一方は堀なり。堀の方より押し寄せて、関をどつと作る。城の内の兵ども、矢先を揃へて差し詰め引き詰め散々に射る。源氏の兵、これを事ともせず、兜の鍔を傾け、喚き叫んで攻め入りければ、桜間の介、敵はじと思ひけん、家子・郎等に防ぎ矢、射させ、我が身は究竟の馬を持つたりければ、うち乗つて希有にして落ちにけり。判官、防ぎ矢射ける兵ども、二十余人が頸斬り、掛けて、いくさ神に祀り、喜びの関を作り、「門出で良し」とぞ宣ひける。

〔A〕判官、近藤六親家を召して、「屋島には、平家の勢、いかほどあるぞ」。「千騎には、よも過ぎ候はじ」。「など、少いぞ」。「かくのごとく、四国の浦々島々に五十騎、百騎づつ差し置かれて候ふ。そのうへ、阿波民部重能が嫡子、田内左衛門教能は、河野四郎が召せども参らぬを攻めんとて、三千余騎で伊予へ越えて候ふ」。

㊦また、親家を召して、「ここより屋島へは、いかほどの道ぞ」と宣へば、「二日路」と申す。「さらば、敵の知らぬ前に寄せよや」とて、駆け足になりて打つほどに、坂東・坂西うち過ぎて、阿波と讃岐の境なる大坂越にかかりて、夜もすがらこそ越え給へ。

【対照本文2】

三条西家本

㊦明くる十八日のまた朝、讃岐国引田といふところの下りて、馬の息をぞ休め給ふ。丹生屋・白鳥・高松の郷をうち過ぎうち過ぎ寄せ給ふほどに、

㊦京の方よりと思しくて、簀笠・粮料・文ども少々たたため持ちたる男三人、行き連れたり。判官、「これはいづちより、いづ方へ行くぞ」。「京より屋島へ参り候ふ」。「屋島へはいづれへ参るぞ」。「都に御わたり候ふ女房の御方より、大臣殿へ参り候ふ」。判官、「これも阿波国の御下人にてあるが、今日初めて召されて参るほどに、いまだ不案内なり。さらば、わ

㊦「さては良い隙ござんなれ。これより屋島へは、いかほどの道ぞ」「二日路で候ふ」「さらば、敵の間かぬ先に寄せよや」とて、駆け足になつて歩ませつ、馳せつ控へつ、阿波と讃岐の境なる大坂越という山を、夜もすがらこそ越えられけれ。

覚一本

㊦夜半ばかり、判官、立文持つたる男に行き連れて、物語し給ふ。この男、夜のことではあり、敵とは夢にも知らず、御方の兵どもの屋島へ参ると思ひけるやらん、うち解けて、こまごまと物語をぞ申しける。「その文は、いづくへぞ」。「屋島の大臣殿へ参り候ふ」。「誰が参らせらるるぞ」。「京より女房の参らせられ候ふ」。

殿、案内者せよかし」と宣へば、「これはたびたび罷り下りて候ふほどに、屋島の案内はよく知りて候ふ」と申す。

㉑ 判官、「何事の御使ひにてかあるらん」と宣へば、

㉒ 「下臈はただ御使ひ仕るばかりにてこそ候へ。何事とは、いかでか知り参らせ候ふべき」と申せば、「それはさぞあるらん」とておはしけるが、ややありて、干し飯食はせなどして、「さるにても何事かあるらん」と問ひ給へば、

㉓ 「別のやうは候ふべき。当時、河尻に源氏の多う浮かびて候ふことを申され候ふにこそ候ふめれ」。

㉔ 「さて、今度の源氏の大將をば誰とか聞く。」「一人は三河守の殿、一人は九郎判官殿とこそ承り候へ。」「さて、わ殿は判官をば見知りたるか。」「さん候ふ。判官は背小さき男の色白きが、向齒の差し現れてしるうましまし候ふ。殿こそ、判官殿に似まゐらせ給ひて候へ」と申せば、「どこなる宿の冥加剥がさん」とぞ宣ひつつ、

㉕ その後、「その文、奪へ。しやつ、縛れ」とて、文を奪ひ取り、「この男を縛りて、こなたへも、かなたへも、行かぬやうにはからへ」と宣へば、承りて、大道より一町ばかり引き入れて、大きな松の木に、締めつけてぞ通られける。

㉖ 「何事なるらん」と宣へば、

㉗ ナシ

㉘ 「別の事は、よも候はじ。源氏、すでに淀・河尻に出で、浮かうで候へば、それをこそ告げ申され候ふらめ」。

㉙ 「げに、さぞあるらん。これも、屋島へ参るが、いまだ案内を知らぬに、尋所せよ」と宣へば、「これは、たびたび参つて候ふあひだ、案内は存知して候ふ。御供、仕らん」と申せば、

㉚ 判官、「その文、取れ」とて、文、奪ひ取らせ、「しやつ、絡めよ。罪作りに、頸な斬つそ」とて、山中の木に縛りつけてぞ、通られける。

〔H〕判官、この文を開いて見給へば、げにも女房の文と思えて、「九郎は、すすじき者にて候ふなれば、かかる大風・大波をも嫌ひ候ふまじきぞ。あひ構へて、御勢を散らさせ給はで、よくよく御用心あるべし」などあり。そのほかの事ども、細やかにぞ書かれたる。「これ、見給へ人々。これこそ、義経に天の与へ給へる文よ。鎌倉殿に見せ申さん」とて、深く収め給ふ。

〔H〕さて、文を開けて見給へば、げにも女房の文と思しくて、「九郎はすすじき男にて候ふなれば、大風・大波をも嫌はず、寄せ候ふらんと思え候ふ。勢ども散らさで、用心せさせ給へ」とぞ書かれたる。判官、「これは、義経に天の与へ給ふ文なり。鎌倉殿に見せ申さん」とて、深く納めて置かれけり。

〔A〕明くる十八日の寅の刻に、讃岐国引田といふ所にうち下りて、人馬の息をぞ休めける。それより、丹生屋・白鳥、うち過ぎうち過ぎ、屋島の城へ寄せ給ふ。

〔注〕

(1) 『平家物語』の伝本は数多くあるが、現在はおおむ

ね以下のような分類がなされている(『平家物語大事典』を参考にした)。

○読み本系

延慶本・長門本・四部合戦状本・南都本・源平盛

衰記など

○語り本系

・断絶平家型

八坂系諸本

一類本…文禄本・三条西家本・中院本など

二類本…城方本・歴史館本など

三類本…太山寺本など

四類本…如白本・両足院本など

五類本…城一本

覚一系諸本周辺本文

屋代本・竹柏園本・平松家本・鎌倉本・百二

十句本など

・灌頂卷型(一方系諸本)

下村本・京師本・覚一本・流布本など

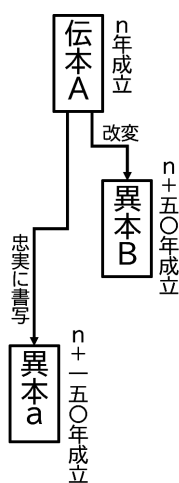
本稿で扱うのは、傍線を付した三条西家本と覚一本である。

(2) 『今井正之助(一九九七)』に、中院本はそれとして

三条西家本とは別に固有の価値を有するという指摘があるが、それもまた重要な観点であることに頷ける。本稿で扱う場面について、三条西家本と中院本には、誤字程度の異同や、助詞の違いなどはあるものの、内部論理の違いはない。当該場面において本稿で見出した結論は、三条西家本を中院本に置き換えても適用できると考えてよいだろう。

(3) 指回論については『野中哲照(二〇二二)』に詳しい。

(4) 実物としての伝本の先後関係は、むしろ文献学的手法のほうが適しているだろうが、あくまでその伝本の成立時期の検討であり、その伝本が持つ本文とその構造の古さや新しさについてを述べようとする途端に鹵車が狂うのである。この点(佐々木八郎(一九四九)が)はやくに言及している。たとえば、現代において伝本Aをもとに内容を改変・改善した異本Bを作成し、さらにその百年後に伝本Aの本文をまったくそのまま書写した異本aを作成し、さらに



その後伝本Aは散逸したとしよう。実体としての成立は異本Bのほうが先で、異本Cは後出である（C一四年代測定を行ってもそのような結果になるだろう）が、本文としては異本aのほうが古く、異本Bが後出である。伝本Aの本文をよりよくしたもののが異本Bであるということは、伝本Aの本文をそのまま残す異本aは、文献学的手法のいうところでは「崩れ」といえることになる。異本aの成立時期は異本Bよりも後にもかかわらず、本文としての「崩れ」と実物の成立時期（刊記などの情報）を結びつけてしまうと、異本aの本文が後出であるということになるだろう。とすれば、異本aの本文は伝本Aと全く同質であるため、伝本Aすら異本Bより後出の本文であることになる。実態と乖離してしまうの

だ。文献学的手法を直前直後の関係などから拡張して用いる危険性はそこにある。

- (5) 三条西家本と覚一本において、当該場面は異なる章段名であったり、章段の区切りが異なっていたりするため、勝浦上陸から屋島合戦開始までをまとめて「屋島合戦前日譚」と呼称した。

- (6) 大坂山・引田・白鳥・丹生屋は北海道と重なる道程である。三条西家本（あるいはその祖本）本文の作成者は、そうした大雑把な地理は把握していたものの、「高松」と「屋島」の距離感覚までは理解できていなかった可能性がある。自身で体験していない状態だったのだろう。書写者の活動圏の問題にかかわってくる点といえる。

- (7) 本稿で述べる〈指向〉のうち、「吉永優真（二〇二四a）」では〈明瞭化指向〉を、「同（二〇二四b）」では〈明瞭化指向〉と〈文脈整理指向〉をすでに指摘している。つまり、これらの〈指向〉は一面に限定して確認できるのではなく、『平家物語』の全体に無数に点入しているのである。

- (8) 三条西家本において、「節縄目」を着用するのは那須

与一に射殺される男、覚一本では熊谷小次郎直家（直実の子）、延慶本では大夫坊覚明（木曾義仲に従う人物）などが挙げられる。大將格ではないものの小軍勢のなかではそれなりの地位にあつておかしくない人間が着用することが多いようだ。また、「黒革緘」は覚一本において、戒浄坊の阿闍梨裕慶、大夫坊覚明、常陸坊正明、平山季重の旗差役の人物、人見四郎、与一に射貫かれる五十代の男が着用している。僧や妙齢の人物、あるいはそれなりの人物の従者に多く用いられるようだ。「節縄目」と「黒革緘」は乖離した印象ではないものの、覚一本においては前者よりも後者のほうが小軍勢を率いる人物として適切だったということなのだろう。第三節第四項で述べたように、覚一本では親家の軍勢が義経の勢の中に取り込まれる。「近藤六が勢、百騎ばかり」と親家がリーダーであるように描くことと通じているのだろう。

(9) 焦点化などで拡散を抑えたからこそ、〈劇場化指向〉が効果を發揮するのだろうか。

(10) 覚一本以外の伝本に「側なる沼よりぞ落ちにける」のような覚一本にはない情報があつて、それを省略

化したということも一応は想定できるが、その新たな伝本と覚一本との先後関係がはっきりしない限りは、三条西家本と覚一本の先後関係の決定に影響を及ぼさないだろう。

(11) 三条西家本は「たうこく」、中院本は「東国」とする。後者は文脈からして誤りである。

(12) 〈指向〉は必ずしもひとつだけで機能しているとは限らない。明瞭化のために文脈を整理するように、ふたつ以上の〈指向〉が働くことも十分にあり得る。火打が城にて義仲勢を裏切った斉明威儀師とほとんどパラレルである。

(13) 火打が城にて義仲勢を裏切った斉明威儀師とほとんどパラレルである。

(14) ただ一か所の異同を抜き出して全体を論じることの危うさがここにある。

(15) あるいはこの神の感応が那須与一の弓などにも通じているのだろうか。那須与一の射扇は「いくさ占い」であるという指摘が〔野中哲照（二〇二二）〕にされている。

(16) ここで劇的にし過ぎない（一の谷合戦や壇の浦合戦ほど）のは、この直後に屋島合戦が控えているからだろう。対能遠戦を肥大化させすぎると、屋島合戦

が霞んでしまっているのである。

- (17) 三条西家本の誤りか。中院本は「いくさしに」とする。
 (18) 三条西家本の脱字。中院本は「めでたさ」とする。
 (19) そのほか、第三節で述べた覚一本の指向が関わる部分にも三条西家本文にはそれとして論理がある。親家が下馬して馬を連れてくることは敬意の表れと取れたり、文を持つ者が三人、かつ荷物も多いことに關しては、現実的な様子を描こうとしたりするものだろう。

- (20) 中院本は「国へ」とする。
 (21) 中院本は「参らせ」がなく、「知り候ふ」とする。
 (22) 中院本は「おはしければ」とする。
 (23) 中院本は「ただし」とする。こちらのほうが適切か。
 (24) 中院本は「ぞ」がなく、「と宣ひつつ」とする。

【依拠テキスト】

- 延慶本……延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注 第六本（巻十一）』汲古書院、二〇一八
 三条西家本……前田育徳会尊経閣文庫蔵の写本による。
 稿者は紙焼きを閲覧している。後述の『校

訂 中院本平家物語』頭注を参考にした。

中院本……国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号「WA71-33」の古活字本）。適宜、今井正之助・千明守編『校訂 中院本平家物語 下』（三弥井書店、二〇一一）の本文を参考にした。

覚一本……市古貞次編『高野本平家物語 十一』（笠間書院、笠間影印叢刊、一九七四）の影印による。梶原正昭・山下宏明校注『平家物語 下』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三）を参考にした。

※いずれも、わたくしに釈文化した本文を用いた。また、引用に際して適宜、傍線・括弧を付したところがある。

【引用文献】

- 山田孝雄（一九一一）『平家物語考』（『平家物語に就きての研究 前編』所収）東京…国定教科書共同販売所
 高橋貞一（一九四三）『平家物語諸本の研究』東京…富山房
 佐々木八郎（一九四九）『平家物語の研究 中』東京…

早稲田大学出版部

渥美かをる（一九六二）『平家物語の基礎的研究』 東京・

三省堂

山下宏明（一九七二）『平家物語研究序説』 東京・明治

書院

山下宏明（一九九七）『平家物語八坂系諸本の研究』 東京・

三弥井書店

今井正之助（一九九七）「中院本『平家物語』本文考——

一方系補入詞章を中心に——」『平家物語八坂系諸本の研

究』 東京・三弥井書店

千明守（二〇二三）『平家物語屋代本とその周辺』 東京・

おうふう

野中哲照（二〇二二）『那須与一の謎を解く』 東京・武

蔵野書院

吉永優真（二〇二四a）「『平家物語』八坂系一類本・二

類本の位相差——巻四の仲綱はなしについて——」『國學

院大學大学院文学研究科論集』 第五一号

吉永優真（二〇二四b）「『平家物語』巻四〈宇治川渡河

ばなし〉の流動展開——八坂系一類本の位置づけを

中心に——」『京都大学国文学論叢』 第五一号

【参考文献】

市古貞次『平家物語②』新編日本古典文学全集（一九九

四年、小学館）

大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子『平家物語大事典』

（二〇一〇年、東京書籍）

【附記】

本稿の内容は一部、國學院大學栃木短期大学にて稿者
が行った、「日本文学演習」での解説を下地としたところ
がある。貴重な典籍（三条西家本）の閲覧をご許可く
ださった前田育徳会尊経閣文庫に、あつく御礼申し上げます。